

2012年度のCERCの活動について

日本における宗教文化教育の質的向上を目指して2011年1月9日に設置された「宗教文化教育推進センター」(通称CERC)は、その規定にあるように「とりわけ大学教育において日本や世界の宗教文化についての基礎的素養及び理解力を養うことを目的」としてしている。そのために行う業務は大きく二つに分けることができる。まず一つ目が、「宗教文化士の認定に関わる」もの、すなわち年2回実施される宗教文化士認定試験の実施である。2011年11月13日(日)に全国6つの大学(北海道大学・東北大学・國學院大學・皇學館大学・関西学院大学・天理大学)を会場に行われた第1回の宗教文化士認定試験では92名もの受験者が集まり(うち58名が合格)、2012年度も2回にわたって実施した宗教文化士認定試験で、のべ100名近い「宗教文化士」を輩出した。

そしてもう一つが「宗教文化教育の充実に関わる」ものである。こちらは2011~2014年度科学研究費補助金基盤研究(B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」(研究代表者 井上順孝國學院大學教授)と密接に連携しており、宗教文化士認定試験受験者から寄せられたアンケート結果をもとに宗教文化を学ぶ人々に使いやすかつ価値のある教材の開発を日々進めている。

以下では、CERCのこれらの活動について報告したい。

1. 宗教文化士認定試験の実施

第2回認定試験は6月24日(日)、東北大

学・國學院大學・皇學館大学・関西学院大学・龍谷大学・天理大学の全部で6つの大学で行われた。受験者総数44名、合格者は23名であった。この回から新たに龍谷大学が試験会場に加わっているが、これにより従来から指摘されていた宗教系の大学を多く擁する京都における宗教文化教育の場の広まりが予想されるだろう。

次の第3回認定試験は11月11日(日)に実施され、受験者は28名、そこから16名の新たな宗教文化士が誕生している。

2. 宗教文化士へのサポート体制

「宗教文化士」にはその資格の性質上、資格取得後も変化し続ける世界および宗教文化についての知見をアップデートし続けることが求められる。そのため、CERCでは宗教文化士に対してさまざまなサポート体制を整えてきた。まず、その中でも特筆すべきは年4回発行される「サークメルマガ」であろう。これはCERCと業務提携を結んでいる宗教情報リサーチセンターが発行する『ラク便り』から、宗教に関連する国内外の記事をピックアップし、それぞれに解説を付したメールマガジンである。これにより宗教文化士は直近に起きた宗教に関わる出来事について、常に新しい情報を得ることが可能になる。そしてまた、それを元にしてさらに自分で興味のある分野を深めていくことが宗教文化士には期待されている。

しかし、興味ある分野について情報を収集するとき、とりわけ宗教に関するものについ

てはある程度のリテラシーが必要となるだろう。また、生きた宗教情報を得るには制限があることも多い。そのようなときに役立つのが CERC の HP (<http://www.cerc.jp/>) に設けられた「宗教文化士専用掲示板」である。宗教文化士からの質問に対し、専門家が適切な解答を寄せるという構造になっているが、宗教文化士がどのような問題意識を持っているのか、あるいは社会で今現在宗教をめぐってどのようなことが話題となっているのかを伺い知れる場ともなっており、資格保持者にもそして宗教文化教育を推進するわれわれにとっても非常に貴重なものとなっている。

その他にも、協定を結んだ機関における「優待」制度を CERC では設けている。資格取得者には「宗教文化士認定証」を発行しているが、それを各博物館等で提示すると入場料が無料（施設によって異なる）になるなどの便宜を受けることができるのである。これは認定試験受験者を対象にしたアンケートでも非常に期待が大きく、今後提携機関を増やしていく予定となっている。これまでに提携協定を結んだ機関は、天理大学附属天理参考館、東洋文庫ミュージアム、宗教情報リサーチセンター、そして國學院大學研究開発推進機構資料館であるが、これらの機関が企画した展示・講演会などの情報はサークルマガを用い宗教文化士に提供されている。

3. 宗教文化教育推進のための事業

CERC では、宗教文化を学ぶために有益な情報を収集・精査しデータベース化したうえで、HP で公開している。また、宗教文化士認定試験を受ける人のみならず、広く一般にも宗教文化について興味を持ってもらうために、随所にさまざまな工夫を凝らしている。以下、個々にその内容について説明をしておく。

①「宗教文化を学ぶための基本書案内」

宗教学一般からユダヤ教・キリスト教・イスラム教・仏教など個別の宗教まで、初学者に適当なテキストを網羅したデータベース。現在 50 冊ほどの書物が紹介されている。

②「映画と宗教文化」

映画は『映画で学ぶ現代宗教』（井上順孝編、弘文堂、2009 年）の「はしがき」で編者の井上が述べるように、「宗教の教えや儀礼だけでなく、生活の中の宗教、あるいは生きた宗教文化を感じ取る上で、きわめてすぐれた素材」である、という認識は多くの大学教員が共有していることだろう。映画で描き出される日常生活のひとつコマはまさに「生活の中の宗教」を鮮やかに映し出してくれる。

「映画と宗教文化」データベースはさまざまな使い方が可能である。各映画には、関係する宗教、関連する地域・国が明記されているのみならず、たとえば「巡礼」について知りたいと思ったら、キーワードからそれを題材にした映画を探し出すこともできるようになっている。また、自分が観たことのある映画がデータベースで検索してみると、実は「キリスト教」をベースにしていたという気づきを後から得ることもあるだろう。現在までに 537 の映画情報がデータベースにおさめられており、うち 133 については解説もなされている。

③「博物館と宗教文化」

データベース自体には 700 を超える博物館・美術館が登録されているが、規模や宗教文化との親和性を図り、30 の博物館・美術館について、簡単な特色と特徴的な展示資料、そして HP のアドレスが紹介されている。

④「世界遺産と宗教文化」

CERC が提供するさまざまなデータベースの中でもトップのアクセス数を誇るのがこの

「世界遺産と宗教文化」である。こちらも600近いデータベースが用意されており、そのうちこれまでに63の世界文化遺産について解説が付けられている。その解説内容は単なる概説とは異なり、宗教学的見地からならではのものとなるよう配慮がなされており、さらに研究者が現地で撮影した画像も豊富に掲載されるなど、これ自体が貴重な資料にもなっている。それが外部からのアクセス数の多さにつながっているのだと考えることができるだろう。

また、解説文で用いられている「基本用語」には、次に紹介する「宗教文化に関する基本用語クイズ」とリンクが貼られ、解説を読みつつ宗教文化に関する知識を楽しみながら得られる工夫が施されているのも特徴である。

⑤「宗教文化に関する基本用語クイズ」

宗教文化を身近なものとして親しんでもらえるよう CERC では3択クイズを多数用意している。これは宗教文化士認定試験の準備にも有効ではあるが、宗教文化を学ぶ入口として、難易度は低めに、しかし基本的なポイントは押さえられるものになっている。

4. 展 望

最後に、認定試験受験者によるアンケート結果から見えてきた今後の課題をまとめておきたい。

これまでに行った認定試験は3回を数えたが、数を経るごとに受験者の在籍する大学が広がりを見せてきていることが分かっている。試験会場は全部で7か所用意されており(北海道大学・東北大学・國學院大學・皇學館大学・龍谷大学・関西学院大学・天理大学)、それぞれが宗教文化士認定試験に関して担当教員を擁する大学であるが、その枠を超えて第3回認定試験の時には、20校近く

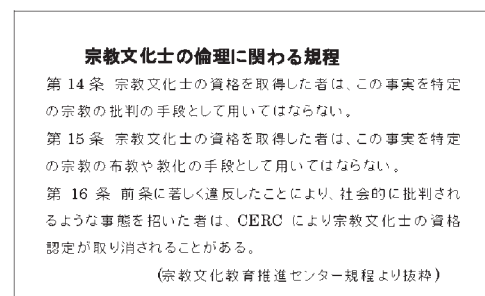
の大学から受験者があった。これまでも行ってきたことではあるが、ポスターやパンフレットを作成し周知を図ることによって資格の認知をさらに広めていく必要があるだろう。

また、「試験対策用のテキストが欲しい」という意見は毎回多く出されるものであるが、この認定試験は概説的な宗教に関する知識のみならず、現在に应用可能な知見を測るものであるがゆえに、テキストが書籍として刊行されることに馴染まない側面があるのも事実である。それだけに、より一層 CERC の HP で公開している、先にも紹介した「教材」としてのデータベースの充実が求められる。アンケートに答えた受験者の約8割が HP 上にある「教材」の存在を認識しており、そのうちの6割強がそれを活用して試験対策を行ったという事実からも、その重要性に疑う余地はないであろう。

(山梨有希子)



宗教文化士認定証 (例・表)



宗教文化士認定証 (例・裏)